様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2015
課題番号：２４６５２１０５

研究課題名（和文）ディスレクシア学習者に対する教授法開発―教員養成における指針の策定と手引書の試作

研究課題名（英文）Developing Teaching Methods for Dyslexic Students: Teacher Training Guidelines and Guidebook

研究代表者
池田　伸子（IKEDA, NOBUKO）

立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授

研究者番号：３０２９４９８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ディスレクシアを抱える学習者が外国語として日本語を学ぶ際に現場の教師にどのような支援が可能なのか、その具体的な方法を明らかにするとともに、ディスレクシアを抱える学習者に対して、前向きに、そして適切に対応することのできる日本語教員を育成するためには、日本語教員養成課程において、どのような項目を扱う必要があるのかを明らかにしたうえでそれらの項目を含んだハンドブックの試作を行った。

研究成果の概要（英文）：This study clarified how teachers of dyslexic students who are learning Japanese as a foreign language can be supported in the workplace; furthermore, it discussed specific methods to be adopted for this purpose. The study also identified the topics that have to be dealt with in Japanese teacher training courses to enable Japanese language teachers to respond appropriately and positively to dyslexic students. Finally, a prototype handbook that included these topics was created.

研究分野：日本語教員養成、日本語教育工学、ディスレクシア学習者支援

キーワード：ディスレクシア　日本語教育　教員養成　教材開発　教育支援

１．研究開始当初の背景

外国語として日本語を教える日本語教育の現場では、様々な母語、背景を持つ学習者に対する対応が求められる。日本語教師は、これまでにも学習者の多様性に対して真摯に向き合い、学習者の母語の違いはもとより、学習スタイル、ビリーフ、ニーズなど、常に学習者の日本語学習をどうすれば最大限支援できるかという姿勢から日本語教育を行ってきた。

近年、これまで対応してきた学習者特性に加えて、学習障害（LD）を抱える日本語学習者が増えてきている。特に、言語を学ぶ際に大きな影響を与えるディスレクシア（難読症）を抱える学習者が日本語教育の現場に存在するということが報告されるようになり、日本語教師は何等かの対応を求められている。

ディスレクシアなどの学習障害に対する教育支援や法整備は、日本に比べて欧米諸国のほうが数段進んでいる。そのような国で日本語を教えている教師は、学習者の状況に適した柔軟な教育支援を求められるし、また、日本国内で日本語教育に携わる教師も、学習者が本国で受けていたのと同等の支援を提供する義務が生じる。

これまで、ディスレクシアに関する研究は、英語などアルファベットを用いる言語についての研究が多かったが、日本語の表記システムはそれとは大きく異なっているため、日本語教育の現場で、適切な学習者支援を行っていくためには、まず、日本語という言語を対象としたディスレクシア研究、そして支援法研究が必要である。

また、本研究の開始時には、現場で日本語を教えている教師のディスレクシアに対する認知度が低く、それが何かすら知らない教師も存在した。ディスレクシアを抱える学習者に対して、適切に対応していくためには、日本語教員養成の段階で、それについての正しい知識、可能な支援について情報を提供していく必要がある。ディスレクシアに対する構えを持った日本語教師の養成も考えていくべき段階にきていたのである。

このように、ディスレクシアを抱える学習者に対する日本語教育支援、ディスレクシアに対応できる日本語教師養成の必要性が少しずつ高まってくる中で、本研究がスタートすることとなった。

２．研究の目的

本研究の目的は、海外（非漢字圏としてディスレクシア成人支援の最も進んでいる英国、フランス）および国内のディスレクシアを抱える日本語学習者の実態調査を実施するとともに、海外、国内の先行研究の分析を通して、以下に示す事柄を実現することである。

(1)ディスレクシアを抱える日本語学習者に対する効果的な教授法を開発すること。

(2)日本語教員養成課程において、ディスレクシアを抱える学習者への対応について取り上げるべき項目（教授項目）を具体的に策定すること。

(3)海外、国内で日本語教育の現場に立つ　教員が、ディスレクシアを抱える学習者に対応する際に役立てられる「ハンドブック」を試作すること。

３．研究の方法

本研究は、次に示す３つの段階で実施した。

まず第１段階としては､国内および海外(英国、フランス）の日本語教育機関において、ディスレクシアを抱える学習者の事例および各国の支援体制がどうなっているのかについての情報を収集した。同時にディスレクシアを抱える学習者に対する外国語教育関連の先行研究を集め、それらの分析を行った。

第 2 段階としては、収集した事例や先行研究を分析した結果に基づいて、ディスレクシアを抱える日本語学習者に効果的な教授法、支援方法を開発する。開発にあたっては、現場の教師が「教室で使える」という視点から実施した。さらに、ディスレクシアを抱える学習者に対応可能な日本語教師を養成するために、教員養成課程において取り上げるべき教授項目について策定を行った。ディスレクシアについての知識、ディスレクシアを抱える学習者に対して日本語を教える際に知っておくべき項目、ディスレクシアを抱える学習者の日本語能力をどのように評価するのかについて教員養成課程で取り上げるべき事項を整理した。

第 3 段階としては、それまでの研究結果を基礎として、具体的教授法の提案、教員養成過程で取り上げるべき項目をまとめた「ハンドブック」の試作を行った。

４．研究成果

(1)海外（イギリス、フランス）におけるディスレクシア学習者支援については、研究協力者の協力を得て、次のことが明らかになった。

①英国（西澤、2016）

英国は、人口の約 10%がディスレクシアであるとも言われており、日本語教育能力試験においてディスレクシア学習者に対する特別措置を最初に実施した国である。そのため、英国においては、ディスレクシアに対する注目度、認知度は高く、支援のための制度も整っている。ディスレクシア認定の手続き、義務教育のみならず高等教育における支援も実施されており、大学などの支援センターでは、金銭的サポート、学習の際の支援が受けられる。主な学習支援としては、試験での時間延長、試験問題の拡大コピー、解答用紙の表紙に「ディスレクシアである」ことを明記し、採点者への注意を促す、試験時のワープロ使用の許可、授業録音の許可、読み物の電

子化、カラーコピーや特定のソフトウエアの使用など多岐にわたっている。また、ディスレクシアを抱える学習者を適切に教室で支援していくためには、教師やクラスメートからの「モラルサポート」が不可欠であり、それが学習者のモティベーション維持には必要であるということがわかった。

②フランス（大島、2016）

フランスでは、ディスレクシアの疑いのある児童は、教室活動を通じて、または小学校3 年次に実施されるフランス語の試験によって見つけ出されることが多く、教師が専門医と連携してディスレクシアであるかどうかの検査を行い認定していく。ディスレクシアだと認定されると、個々の必要性に応じて個別支援プランを立ててもらい、教師や言語障害治療士が協力して支援を行っていく。高等教育機関においても支援は実施されており、英国のところで述べたもの以外にも、試験の免除、何度かに分けて試験を受けられるようにするための試験期間の変更なども実施されている。また、授業中については、エラーの非考慮、筆記試験より口頭試験の優先なども実施されている。また、『どうやって教室でディスレクシア児童を支援するか？』（フランス言語学習困難児童親の会、2010）や『ディスレクシアに関する教師のための手引書』（ディジョン大学区事務担当機関、2009）なども出版され、教育現場でディスレクシア学習者を支援していくという姿勢が示されている。そして、すべてのディスレクシア学習者に効果的なメソッドやツールなどは存在しないため、現場の教師がすぐに使える「具体的な手引書」が有用であるとされている。

(2)国内におけるディスレクシア学習者支援

国内におけるディスレクシア学習者支援は、まだ始まったばかりであり、その多くは「児童」を対象としたものである。さらに、ディスレクシアを抱える学習者の「母語」習得に関するものが多く、彼らの外国語学習に焦点を当てたものは少ない。

本研究では、国内の日本語教育の現場で教壇に立つ教師に、ディスレクシアに関するアンケート調査を実施した。その結果、ディスレクシア自体を知らない教師がいること、ディスレクシアを知っているという教師でも、間違った認識を持っていることが明らかになった（池田、2013）。ディスレクシアを抱える学習者の日本語学習が成功するかどうかは、対応する教師によるところが大きいことから、教員養成課程でディスレクシアについて取り上げる必要性が明らかになった。

(3)教室で使える具体的指導法

イギリス、フランス等の事例から明らかになったのは、「現場の教師がすぐに使える具体的な支援方法」を示すことの必要性である。日本語の場合、ひらがなやカタカナについては、文字と音が１対１対応であるためそれほど困難ではないが、それでも、概念を利用した指導法（「う」という文字の形と「馬の絵」をマッチングさせるなど）の工夫は必要である。また、拍感覚を学習者に提示する際には、積み木などを利用して指導するなどの工夫が必要である。また、漢字の指導に際しては、漢字の構成要素を音声で示したり、ブロックを積み上げていくことで１つの感じになるような教材の使用が有効である（池田、2015）。読解の指導に関しては、カラースケールを使って、読んでいる位置を示したり、教師があらかじめ教科書のテキストをコンピュータに取り込んで置き、それをスクリーンに映しながら授業を実施するなどの工夫が可能であろう。また、コンピュータを利用した支援教材は、英語圏においては多数存在しているため、そのような教材の中から利用できるノウハウを日本語教育に適用していく必要性も感じた。

教材や指導法に関しては、先行研究から、ディスレクシアの症状は人によってまちまちであるため、個々の学習者がどこに困難を感じているかによって個別に支援プログラムを組んで対応していく必要性を感じた。個別支援プログラムをどのように策定していくかについては、今後の課題である。

(3)日本語教員養成課程で扱うべき項目

先行研究や実施したアンケートから、日本語教員養成課程では、ディスレクシアについての正しい知識、ディスレクシアの具体的な症状（教室でどのような困難を示すのか）、ディスレクシアではないかと疑われる学習者がいた際に教師がすぐにできる支援方法、教師がアクセス可能なリソースはどこにあるか、などについて取り上げていくべきであると思われる。現在の日本語教員養成課程でも、母語の違いや能力差、学習スタイルの違いなど、学習者の多様性については取り上げているが、今後はそれに加えて、上述したような学習障害、特に言語の習得に大きく影響するディスレクシアについては取り上げていくべきであろう。

(4)今後の課題

今回の研究を通して、ディスレクシアを抱える学習者の日本語学習を支援するためには、現場の教師がすぐに利用することができる支援策を提案することの必要性を強く感じた。また、ディスレクシアを抱える学習者の症状は多様であるため、個別に適切な支援を提供していくことの重要性も感じた。

そこで、今後は、学習者の症状を教師が適切に判断し、個別に支援プログラムを策定して対応する手順について研究を行っていかなければならない。また、ディスレクシアを抱える学習者に対して、常に前向きに対応できる教師を育成するための、具体的な教員養成プログラム（どのように必要な項目を教えていくのか）の開発も実施していく必要があ

ると思われる。単に知識を提供しただけでは、ディスレクシアの学習者を目の前にしたときに、すぐに積極的に対応できる教員は育成できない。知識を実践に結び付けていくためには、態度の変容が必要であり、今後はそのための研究を行っていく必要があろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　6 件）

① 池田伸子（2015）「ディスレクシアを抱える日本語学習者に対する読み学習支援に関する一考　察」、『日本語教育実践研究』第 2 号、pp.1-15　査読有

② 池田伸子（2015）「学習者の多様性に対応できる日本語教育とは―高等教育機関における日本語学習者支援体制の構築に向けて―」、『ことば・文化・コミュニケーション』第 7 号、pp.115-126 査読無

③ 池田伸子・守時なぎさ（2013）「スロヴェニア共和国における読み書き障害支援政策の沿革―ディスレクシアの学習者を対象とした日本語教育支援の基礎として―」、『ことば・文化・コミュニケーション』５号、pp.141-152　査読無

④ 池田伸子（2013）「日本語教師はディスレクシアをどう認識しているのか―日本語教員養成プログラム開発のための基礎研究―」、『日本語教育実践研究』創刊号、pp.1-15　査読有

⑤ 池田伸子（2013）「発達性ディスレクシアを抱える日本語学習者への支援や指導につながる研究の必要性」、『日本語・日本語教育』創刊号、pp.21-46 査読有

⑥ 大島弘子（2013）「フランスの大学における障害学生支援政策とディスレクシア学生―パリ・ディドロ大学の場合」、『日本語教育実践研究』創刊号、pp.42-50 査読有

〔学会発表〕（計　4 件）

① 池田伸子、「日本の日本語教育機関はディスレクシアを抱える学習者をどう支援できるのか」、立教日本語教育実践学会、2014 年 12 月 22 日、立教大学（東京都・豊島区）

② 大島弘子、「フランスにおけるディスレクシア学習者への対応」、立教日本語教育実践学会、2014 年 12 月 22 日、立教大学（東京都・豊島区）

③ 西澤芳織、「イギリスにおけるディスレクシア学習者への対応」　立教日本語教育実践学会、2014 年 12 月 22 日、立教大学（東京都・豊島区）

④ 西澤芳織・池田伸子・石田敏子、「日本語教育におけるディスレクシアへの対応―日本語教師養成課程用手引書作成に向けて―」、第 16 回英国日本語教育学会年次大会、2013 年 8 月 30 日、ノッティンガム大学（イギリス・ノッティンガム）

〔報告書、ハンドブック〕（計　2 件）

① 池田　伸子（2016）『日本語教師を目指す人、日本語教育現場で働く人のためのディスレクシアハンドブック』

② 池田　伸子（2016）『ディスレクシア学習者に対する教授法開発―教員養成における指針の策定と手引書の試作』

６．研究組織

(1)研究代表者

池田　伸子（IKEDA, Nobuko）
研究者番号：30294987
立教大学異文化コミュニケーション学部
教授

(4)研究協力者

石田　敏子（ISHIDA, Toshiko）
筑波大学　名誉教授
大島　弘子（OSHIMA, Hiroko）
パリ・ディドロ（パリ第七）大学
東洋言語文化学部　准教授
西澤　芳織（NISHIZAWA, Kaori）
Faculty of Oriental Studies,
University of Oxford
Nissan Instructor in Japanese